2
【ひろばの風】
現代とはどんな「時代」か、
再生の資源はいずこに？
人間社会学科長　横山 知玄

4
【Campus News】
『トトロ』が国際ソロプチミスト松山より活動援助金を授与
剣道部が愛媛国体の運動部強化・育成指定校（強化拠点大学）に指定

4
【Campus News】
オープンキャンパス
「ボランティアウィーク」と「ぽけっとまつり」を同時開催
松山まつり「野球拳おどり」で『南海放送賞』を受賞

5
【ESSAY】
研究室で耳を澄ませて…。
保育学科　竹田 信恵

Amor et Veritas
SCU

カタリナ ひろば

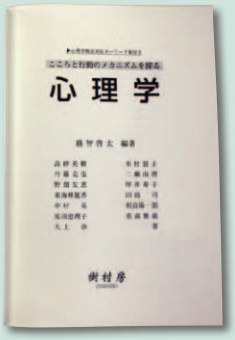
Vol.25 No.1
2012.11

聖カタリナ大学
聖カタリナ大学短期大学部
www.catherine.ac.jp

6
【ゼミナールインタビュー】
人間健康福祉学部
恒吉 和徳 ゼミ

7
【ようこそ就職課へ】
就職課 Now!!
就職課長　廣嶋 守

8
【教員著書紹介】
『心理学―こころと行動のメカニズムを探る』
第3･4章執筆担当　丹藤克也（聖カタリナ大学 講師）
越智啓太（編）：樹村房　2012年



8
【クラブ紹介】
サッカー部
部長　人間健康福祉学部２年
城戸 崇行さん

現代とはどんな「時代」か、再生の資源はいずこに？

人間社会学科長　横山　知玄

明日に希望をもって、時代の問題を尋ねてみたい。これまで現代という時代はあるときは幕末に、あるときには平安末期に、さらにルネサンスの時代にも例えられることがある。何れも混沌（アノミー）の時代である。が、また一大飛躍の時代でもあった。

時代の転機は青年期にみられる危機に類似した症状をみせる。青年は17歳前後になると過去の自己と現在の自己（歴史体験）とを対立させ、時代の自明な思惟をモデルに新たな青年世代を統一していく。が、歴史変動の時代はこのモデルがなく自我（世代）の統一が困難となり外的にも内的にも疾風怒濤の経験が待ち受ける。これは30年代ナチによる肥大する国家（中間集団の弱体化）とその社会に生きる青年世代に関する時代の診断（マンハイム）である。「砂のような個人」「甲羅の無い蟹」そして「根無し草」という人間の所見もある。モデルなき時代は互いに支え合うことを失うために自らの所属する集団が閉鎖的になってときに唯一絶対の世界となることがある。彼の動機をもその集団が支配する。集団の有り様が人々の意識・態度・行動を規定するからである。

自らの命を絶つことはこの変動期に多くみられる。痛ましさは彼の心がその集団によって作り上げられ（構築され）たところにある。動機とは、行為者の内面に在る単なる心理的事実ではない。人々の行為を解釈する際に用いる語彙であって個人心理に外在した社会的な知識で、人々が自分を見いだす状況から発生する場合が大部分である（ミード／ミルズ）。人の心とは内在化された外部の環境のことなのである。苦悩はまたその人に固有のバースマーク（母斑）を残していく。青年の危機克服は多くのオープンな集団に交わり、今の苦しみの経験を説明し意味づける「宗教」の再確認にあろう。自らの苦悩（バースマーク）がその人を救うことを記しておきたい。

時代の問題は人に終わらない。グローバルな産業社会の変動は恰も時速800㌔の「津波」のように地域を越え、国境を超え、容赦なく企業や国家に押し寄せる。ギリシャ金融危機はグローバルな国家間の姿（reciprocity）をよく表している。他方、変化する時代は企業など組織の事故も多発する。かつての東海村燃料会社の燃料漏れ、乳業会社の廃棄物再利用、証券会社の倒産、金融機関の規定外取引、年金機構の破綻、会計基準の国際化とカメラ会社の会計操作・損失隠し、原子力発電所事故とその対処の仕方、地検特捜部の罪状捏造、そして教育委員会組織の対応…等。事故や事件には、多くの場合それまでの通常業務の枠組みでは既に処しえなくなっている時代背景がある。何れも組織が閉ざされた環境の内在化になり、病的症状に似た行動を認めることがある。江戸時代の末、「のれん」で生きてきた老舗が次々と破綻していった時代の姿と重なる。この頃、幕府という国家機構も既に通常業務ではなしえなくなっていた。

では、こうした危機を超えさせたのは一体何だったのだろうか？　近県の例をあげよう。山口は長州、過去に固有の経験をもっている。長州毛利家（吉川広家）は関ヶ原の合戦で家康の使いの花押なき書状（毛利輝元に対して聊（いささ）か以て内府御如在（ごじょさい）あるまじき事＝毛利の領土は安堵する）を受け取る。武士の真義を愚直に信じたが、花押なき証文は陰謀だった。家康は領地を容赦なく没収（120万石から37万石に封印）した。長州は混乱のなか田地を失い農民に身分を変えた藩士に機あらば決起の号令をかけることを毎年通達、新政府の機を窺った。山口には山中奥深く当時の水田の痕跡を今に留める。英国に渡った藩士たちは近代国家の原型を欧州にもとめ、憲法と三権分立、世界の列強に比する国家を構想、そして辛酸をなめた毛利の経験がまた多くの人材を育て建国への異常なエネルギーを生み出した。これが長州固有のバースマークとなって比類なき宰相輩出県となった。一方の徳川は権力を奪ったが幕末には果てることになる。教典には「善悪の業報に三時有り（自分の代、子どもの代、孫の代、永

代にわたって、自己の善悪の業の報いは必ず還ってくる)」とある。日本の新国家の構成は危機を経て世界という普遍的な枠組み（環境）を取得した結果であった。さらにイギリス留学経験からは、資本主義には階級の問題が、したがって社会福祉や社会事業の必要性が、大学には様々な思想が混在する可能性が、したがって小中学校の生徒の教育には特定思想を伝えない教師育成の師範が、医療には近代的な西欧医学が、そして盲聾唖者には手話教育が、それぞれ要ることを学んだ（S. リプセット）。ともに国家形成のための組織（国家）の普遍的な「環境の内在化」であった。

江戸末期から明治期の事業の再生は家業の統合・再編とともにまた環境の取得にあった。老舗は「家訓」とムラの共同体の生き方を取り入れ、「のれん」をもたない近江商人は宗教理念にもとづいた、後世の名称だが、「三方よし」（売り手、買い手、世間に利する）という環境の論理の取得に賭けた。今でいう企業の社会的責任（CSR）である（因みに「日本的経営」の源流はこの江戸期にある）。事業家は家と共同生活の思惟に源流をもとめ、「家訓」に謳われている家の永続と家族の協力、また地域社会の奉仕という理念から会社の永続と社員共存の精神、また社会への貢献を事業組織の環境として内在化した。とくに、また「のれん」なき近江商人は宗教的エートスによる共に利する「自利・利他、そして世のため」の精神を事業経営に内在化した。多くの事業体も創設者の生死をかけた苦悩の経験を意味付ける宗教や商人道という環境を、つまり人々の日常生活を深層で支える類似した「思惟（意味）」（これを「制度」という）を取得し自己と事業の再生の資源とした。かくしてムラの人が集まり（会）事業を営む（社）ことが「会社」となった。事業主には創業のライフストーリーをバースマークとして宿し、それが現代の各事業活動を司る「構造」となっていることが多い。

さて、大学はどうか。西欧の大学に共通するのはキャンパスに「チャペル」があることだ。そして何故この大学があるかをエンブレムに表している。ハーバード大学にはVE RI TAS（真理）が、スタンフォードにはスタンフォード・ジュニア・ユニバーシティが掲げられている。前者は英国からの移住者・聖職者による広大な土地と蔵書を寄附した人の名とキリスト教の理念（真理）をもって教育・研究を広める使命が、後者は欧州旅行の病がもとで16歳（14歳とも別資料にあるが）の若さでなくなったセントラルパシフィック鉄道王・R. スタンフォードの一粒種ジュニアの魂を癒し、同じ年頃の子弟を育成する使命（自由の風そよぐパロアルトの空）が、それぞれ大学とチャペルに託されている。さらにケンブリッジには聖カタリナの受難のシンボル（カタリナ・ホイール＝スパイクの車輪）がエンブレム（St.Catherine Hall）に納められている。それはスパイクの車輪による拷問、虐待、捏造された不正の汚名にも奇跡的に生き、斬首の殉教を越え永遠に真理を求めるカタリナの象徴表現となっている。ともに創設のライフストーリーがある。この意味で大学とは宗教・真理という環境の内在化なのである。

ハーバード

スタンフォード

ケンブリッジ·カタリナ·ホイール

本学は日本の大学では数少ないチャペルと西日本屈指のパイプオルガンをもつ大学だ。また本学にはハーバードと同じVE RI TAS（真理）が、そしてケンブリッジと同じくイタリアはシエナの聖女カタリナの「真理を愛する」（Amor et Veritas）理念が掲げられ、創学の精神が表現されている。14世紀の第2次ペスト大流行で病に伏す人の介護と救済、荒廃した国土の復興と救世の為に殉教されたその聖女に因む。病の癒しと救済、そして国家社会に貢献できる人材の養成が創学の精神にある。シエナはフィレンツェの南約60km、ルネサンスは再生の意味、聖カタリナはこの復興の時代の人である。本学のさらなる飛躍の資源（環境）は受難を超えていった聖カタリナの病の救済と地域貢献というバースマークにあるといえよう。

どこから来てどこに行くのか、その道筋を示すのが創業のバースマークでありエンブレムである。人間の行為は歴史的である（スコット）。大きな転機や困窮にあるときとき、人も組織体もそして国家もその過去の固有の経験が再登場する。それが根源的でより広い普遍的な思惟（制度）にふれ合うとき一大飛躍する。

困苦のバースマークは再びその魂に形を与えてくれる。分水嶺は固有の経験と開かれた普遍的な環境の内在化にある。ここに再生と飛躍の資源がある。学内で常日頃より本学聖カタリナの起源が内外に向けて語り続けられることを祈りたい。

『トトロ』が国際ソロプチミスト松山より活動援助金を授与

本学の学生ボランティアサークル『トトロ』が、国際ソロプチミスト松山よりシグマソサエティとしての認証を受け、活動援助金を頂きました。

『トトロ』は、発達に障がいのある子どもたちとの交流活動を行っており、今回の活動援助金をもとに、今後子どもたちとのキャンプなどをさらに積極的に行う予定にしています。

剣道部が愛媛国体の運動部強化・育成指定校（強化拠点大学）に指定

聖カタリナ大学剣道部が平成29年に開催される愛媛国体の運動部強化・育成指定校（強化拠点大学）に昨年度に引き続き、指定されました。

これは、愛媛国体開催時に出場する選手の、積極的かつ効果的な育成強化を図るとともに「愛媛県手づくり選手の育成強化」の実現と愛媛県スポーツの飛躍的な発展を期することを目的としています。

なお、5月20日（日）、愛媛県武道館で行われた中四国学生剣道選手権大会において、松下裕司さん（大学1年）がベスト16、谷内麻里絵さん（短大1年）がベスト8に入賞し、7月7日（土）、8日（日）に日本武道館で行われた全日本学生剣道選手権大会に出場しました。

また、8月26日（日）、岡山市総合文化体育館で行われた第39回中四国女子学生剣道優勝大会において、剣道部女子が第三位に入賞し、14年連続で全日本女子学生剣道優勝大会へ出場することが決定しました。 また、山畑佳代さん（大学3年）が優秀選手賞を受賞しました。

オープンキャンパス

2012年度のオープンキャンパスを6月23日（土）、7月14日（土）、8月5日（日）、9月17日（月）に開催しました。全日程とも、多くの高校生や保護者の方々にご来場いただき、誠にありがとうございました。

また、今年度もスタッフとして多くの在学生の協力があり、若者の交流の場ともなる本学らしいオープンキャンパスの開催となりました。

「ボランティアウィーク」と「ぽけっとまつり」を同時開催

7月7日（土）に学生ボランティアセンター主催の第10回ボランティアウィーク公開イベント「届けよう愛の溢れる思い～小さな努力で、大きな感謝～」が本学で開催されました。

キャンパスで福祉施設や学生によるバザーやフリーマーケット、聖カタリナホールでは北条高校吹奏楽部・松龍鼓（和太鼓）によるチャリティコンサート、聖カタリナ女子高校華道部、本学の各サークルによる発表など、楽しいイベントが多数とり行われました。

今年度は記念すべき10周年ということもあり、例年の企画に加え記念イベントとしてカタリナグッズやカタリナ漬け等が当たる大抽選会が行われ、多数の方にご参加いただきました。

ご来場いただきました皆様、募金活動にご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

当日、各ブースの募金箱等へいただいた募金及び収益金は、国内外の福祉団体・非営利組織等に寄附させていただきました。

また、カタリナ子育て支援ひろば『ぽけっと』主催の「ぽけっとまつり」も同時開催され、多くの親子連れで賑わい楽しい一日となりました。

松山まつり「野球拳おどり」で『南海放送賞』を受賞

今年も松山まつりの「野球拳おどり」に出場し、3年連続の入賞を果たしました。

ダンス部と有志たちの総勢71名で編成された聖カタリナ大学ダンス部連は、心をひとつにして元気いっぱいに、いきいきと踊りました。

学生たちの顔は、みんなでやり遂げた充実感に満ちあふれていました。

ESSAY

研究室で耳を澄ませて…。

保育学科　竹田　信恵

研究室の窓からの風景

カタリナ北条キャンパスで幾年かの日々を過ごしてきた私は、このたび、初めて保育学科研究室の住人となった。それまでの住み家は正面玄関2F、四季折々の木々花々で彩られたキャンパスの風景が一望できるお気に入りの場所。それが一転、新しい住み家の窓から見えるのは、隣の建物の壁と窓、小さなショックを隠せないでの引っ越しであった。しかし、4月から保育学科2年生になろうとしていた学生らによってその気持ちは解消された。

当時、彼らはカタリナキャンプの準備の最終段階に入っていた。カタリナキャンプとは、先輩学生が主体的に企画・実施する、新入生歓迎の大イベントである。保育学科の場合、各クラスによるオペレッタ発表や、交流会、レクリエーションを行っている。これを成功させようと、春休み中にもかかわらず、せっせと通学し、仲間たちとワイワイと企画、練習に励む学生たちに出会った。遠くからでも「シスター！」「シスター！」と声をかけてくれる学生たち。「あれ？引っ越し？」「保育にくるの？やったー！」との歓迎ぶり。何よりも、彼らの生き生き、キラキラした姿が嬉しかった。1年次の授業で出会ったあの学生たちが、しばらく見ないうちにこんなに成長していたとは。

カタリナキャンプのひとコマ

これまで、保育学科棟は未知の世界だった。知っていたつもりが知らなかった。見ていたつもりが見えていなかった。ここの住人になって初めて知ったこと、それは、ここでカタリナの伝統と精神が脈々と受け継がれて「ある」ということ。

「Charity for your neighbours」とは、一昨年、本学のスクールモットーとして掲げられたばかりの言葉である。しかし、その深奥には、開学当初から積み上げられてきた、一人一人の体験がある。本学の保護の聖人であるカタリナの大切にしていたこの言葉を、生きてきた一人ひとりの体験がつまっている。

ふと、はるか昔の出来事を思い出した。高3のある嵐の日、友だちと4人で本学を訪れた。オープンキャンパスなどない時代であったが、学内を案内して下さった上に、天候の悪い中、せっかく来たのだからと、応接室までご案内いただき、ご接待してくださった事務員さん。今でこそありうるだろうが、当時、ふらっと訪れた高校生ごときにこんなおもてなしは珍しい。今でも覚えているゴンチャロフのクッキーと、ほどよい温かさのレモンティ。この短大で学びたいと思った瞬間。そして、帰り際に事務所を横切った白い物体、「何？」「あ・シスター？」「なんで、こんな所にシスターがおるんじゃろ？」それがシスターをナマで見た最初の瞬間。（シスターは外国の教会にいるものとばかり思っていた。）

そして、入学式のキャンドルサービス。今は亡き上妻理事長のお言葉、「このろうそくはキリストの象徴です。キリストは、自分を溶かして、周りを照らす光です。」厳粛なるカタリナホールの懐に包まれて、ろうそくの光を見つめつつ、ここには、何か違うものがあるという予感。ここに来てよかったと思った瞬間。それに続くオリエンテーションで、すっかり本学のとりこになった私。価値観の逆転。公立高校でバレーボール部のキャプテンとして、強くなれと言われ続け、それをそのまま、後輩に伝えてきたそれまでの生活。どこか、自分を偽り、虚勢を張っていた私の全身から力が抜けた瞬間。よじれていた頭が真っ直ぐになった感があった。ここカタリナには、弱くてもいい、弱いものこそ強いという逆転の思想がある。（コリントの信徒への手紙二・12章10節参照）。そして、お互いに弱さを補い“愛”ながら共に歩むこと、これがカタリナのキャンパスライフ。

浮かない顔で引っ越しをしている私に優しい言葉をかけてくれた学生たちには、その精神がしっかり受け継がれ、宿っていた。そして彼らは、不安を抱いてくる新入生たちにも同じように声をかけ、自分たちの仲間として受け入れていた。カタリナキャンプアンケートでの1年生の記述。

「先輩たちみたいになりたい」

人を大切にすることを学びながら、彼らはやがて子どもを育てる職につくべく巣立って行く。昨年、卒業前の学生に実施した満足度調査では保育学科における学生生活全般の充実度が高い数値（93%）として表れ、多くの学生が後輩に入学を勧めたいと答えた（89%）。26項目に及ぶこのアンケート結果から、学生の姿が透けて見えてくる。

さて、保育学科研究室に移ってまもなく、気づいたことがある。確かに窓からは、白い建物しか見えない。しかし、耳を澄ませると、日々練習に励む学生のピアノの音色、体育館からの威勢のいい声、フォークソング部サークルボックスからのエレキギターの音、そして、学生ホールでくつろぐ学生たちの明るい笑い声が聞こえてくる。きっと、私の新しい研究室は、見るための研究室ではなく、学生たちのありのままの姿を感じながら、聴くための住み家なのだろう。

毎朝、保育学科棟へ向かうメインストリートを通りながら、今日は、どんな音が聴こえてくるだろうかと、ワクワクしている今日この頃。

ゼミナール インタビュー

人間健康福祉学部 恒吉 和徳 ゼミ

ゼミのテーマを教えてください。

このゼミでは「地域社会における福祉問題を考える」をテーマに、今地域でどのような福祉問題があるのか、なぜそのような問題が発生するのか、その問題を解決するためには何が必要であるか、についてディスカッションし、自分なりの意見、考えを持てるようになることを目標にしています。主に高齢者に関する問題を取り上げますが、それ以外に児童や障がい者の生活領域に入ることもあります。

ゼミの特徴を教えてください。

様々な福祉の問題やそれに関連した政策のあり方については老人福祉論、児童福祉論、障害者福祉論、地域福祉論、などの専門科目で学びますが、一つの問題に対して周囲の意見を聞きながらじっくりと考える、といった機会は受講生の数の問題や時間の制約などもありなかなか難しいです。本ゼミでは欲張らずに１回のゼミでとりあげるテーマを１つにし、学生が自由に意見を述べ合う時間をできるだけ多く設けるようにしています。

ゼミのスタイルを教えてください。

学生同士のディスカッションを中心にしています。学生が新聞や雑誌などから気になった記事を拾って皆の前で読み上げ、その内容について自分なりの感想、考え、疑問などを報告し、その後小グループに分かれディスカッションします。以外と？いい感じで各々意見を述べ合っているようです。後半でそれぞれのグループで出た意見を報告し、私のほうから補足説明を行うといった流れになります。あくまでも学生を主体とし、「学生の、学生による、学生のためのゼミ」を目指しているのですが、たまに？気が付いたら私が熱く話していた、なんてこともあります。例年、前期で学生が取り上げるテーマの内容に応じて、後期は一つのテーマに絞って研究らしきことにも取り組みます。ちなみに昨年度は「高齢者福祉に関する若者の意識レベル」をテーマに本学や他の学校の学生にアンケート調査を行い分析を試みました。本年度はどうなることやら。

恒吉ゼミはこんなゼミ

恒吉ゼミは少人数の特性を活かし、みんなで自由にディスカッションしてお互いの意見を交換し合いながら、いろんなことを考える機会になっています。テーマによってはなかなか意見が出にくい時もありますが、その時は恒吉先生の熱弁をみんなで楽しく聞きながら参加しています。また、ゼミコンパなどを開いてメンバー間の交流を深めるなど楽しく活動しています。

（社会福祉学科　３年　梅原　弘規）

就職課Now!!

私は平成17年度から本学の就職支援業務に携わっておりますが、8年目の就職支援もはや後半戦に入りました。全般的な業務は毎年同じような流れで進んではおりますが、学生一人ひとりの抱える事情は千差万別で、それゆえの難しさとそれに勝る楽しさ、喜びを感じながら日々支援に取り組んでいます。

さて、平成24年度の就職活動状況を知っていただくために、まず現在の就職内定状況からお話しします。新聞等によると今年度の就職内定状況は全般的に前年までに比べ良好であるとの報道が多いようですが、本学においても平成24年8月20日現在の内定状況は大学においては19.3%、対前年同期比プラス4.2ポイント、短期大学部においても4.2%、対前年同期比プラス2.5ポイントと、ともに好調に推移しています。

今年度の特徴的なこととして、大学の福祉マネジメント専攻の内定率が32.1%、対前年同期比プラス28.5ポイントと大健闘していることが挙げられます。就職での企業と福祉系専門職の比率においても、企業が対前年同期比プラス18.4ポイントと、福祉マネジメント専攻の学生の健闘が数字にも表れてきています。これは他の専攻の学生にも言えることですが、今年度は比較的早い時期から就職課へ出入りする学生が多く、その学生が内定を取ることで他の学生を刺激していったのではないかと考えています。「学生が来やすい就職課」を目標にしてまいりましたので、少しは浸透してきたのではないかと喜んでいます。

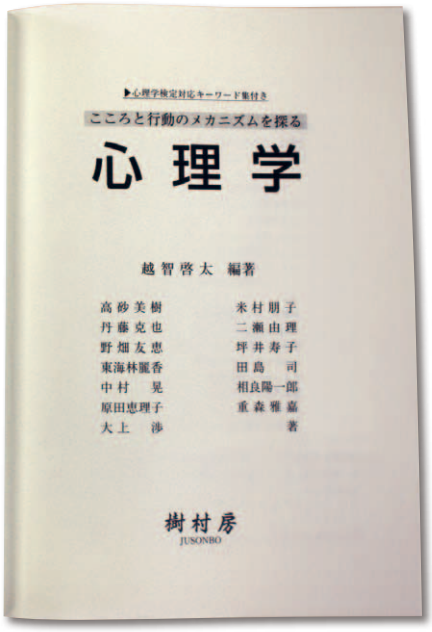
今年度のこれまでの4年生の就職活動を分析してみますと、10社以上の企業を受験している学生が大幅に増えています。企業の内定を得るためには、希望する業種や職種を絞りこみすぎないこと、そして内定獲得まで休まず突っ走ることが大切です。過去7年間の事例から見ても、途中で中休みをした学生で企業の内定を得られたケースは少なく、一時休止した後に活動を再開するということがどれほど難しいかということを思い知らされています。未内定の就活生にとっては今が一番しんどい時期ですので、私たち就職課にとってはいかにして学生の意欲を萎えさせないか工夫のしどころです。

夏休み明けからは福祉専門職の就職活動が本格化しています。福祉専門職は企業に比べれば内定を得やすい状況が続いており、企業への就職活動を継続している学生に対しても、夏休み以降は福祉専門職も選択肢として検討してみるよう勧めています。特に介護職はたくさんの求人があるため、学生には施設見学などを通じて、経営方針や勤務条件などが自分に合う施設なのかをしっかり見極めるよう指導しています。一方で相談員や児童支援員等の求人は介護職に比べると少なくなりますので、就職課ではそのような求人情報を素早くキャッチし、学生の希望に添って情報を提供するとともに、学生自らがボランティア等で積極的に施設に出向き、求人情報の収集や自己ＰＲをすることを奨励しています。なお相談員の採用試験では筆記や小論文を課せられることも多いため、対策として早めに国家試験の勉強に取り組み時間的な余裕を生みだすことも必要だと感じています。

これから卒業まであとわずかです。学生が本当に就職してよかったと思える就職先に出会えるよう、彼らと一緒に探していくことが就職課の一番の任務だと考えて、これからの支援に当たっていきたいと考えております。

就職課長　　廣嶋　守

教員著書紹介



『心理学 ―こころと行動のメカニズムを探る』

第3･4章執筆担当　丹藤克也(聖カタリナ大学 講師)
越智啓太(編)：樹村房　2012年

本書は心理学の入門講義のためのテキストとして編集されたものです。講義のためのテキストといっても、心理学に興味をもっている高校生や社会人の方々が、心理学を独学するために利用するのにも適した内容となっています。

本書の大きな特徴は、最近始まった「心理学検定」という、心理学の知識や能力を測る検定試験に対応している点です（心理学検定は、誰でも受検できます）。心理学検定のホームページでも「検定局推薦のテキスト」として紹介されています。本書はテキストとしての「お堅さ」を残しつつ、「美人・ハンサムとは何だろうか？」「子どもの頃の思い出は信用できるのか？」といったような、一般の人にも興味を持っていただける話題がちりばめられているのも特徴です。さらに、入門書としてはめずらしく、いじめや不登校、犯罪や非行といったトピックについても、多くのページが割かされています。私が執筆を担当したのは「学習」と「記憶」についての2つの章です。「記憶」の章では記憶の一般的なメカニズムだけでなく、「記憶の改善法」についても簡単に触れています。

ここで紹介した以外にも、たくさんの興味深いトピックが扱われています。心理学に興味のある方や、心理学検定に興味をもたれた方がいれば、ぜひご一読ください。心理学の全体像を、楽しく理解できると思います。

クラブ紹介 サッカー部

私たちサッカー部は選手13人、マネージャー4人で今年できたばかりのチームです。大学サッカーの指導経験を持つ二人の教員スタッフの下で通常は毎週火曜日、水曜日、金曜日に北条文化の森公園で練習をしています。とても熱い指導で選手みんなの技術もどんどん向上しています。初めての四国インカレではキャプテンを中心に一丸となって初出場とは思えない旋風を起こし健闘しましたが準々決勝で破れ、ベスト8という成績でした。しかし、この初めての大会でたくさんの悔しい気持ちと改善すべき課題を見つけることができ、そしてスポーツでこそ得られる熱い気持ちや大切な仲間の存在に改めて気付きました。来年の四国インカレでは、さらにチーム力を上げ、絶対優勝したいと思っています。私たちのサークルはとても個性的で仲良しでいつも笑いが絶えないサークルです。大学生活を彩る思い出をつくる機会がたくさんあります！ぜひ、見学に来てください。

部長　人間健康福祉学部２年
城戸　崇行

Amor et Veritas SCU
学校法人 聖カタリナ学園
聖カタリナ大学
カタリナひろば　vol.25 No.1
編集・発行
広 報 委 員 会
〒799-2496　松山市北条660番地
TEL (089) 993-0702 (代)
kouhou@catherine.ac.jp